

燃える秋

燃える秋
五木寛之

角川書店



燃える秋 五木寛之

昭和五十三年一月十日 初版発行
昭和五十三年二月二十日 三版発行
発行者 角川春樹
印刷所 旭印刷株式会社
製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二丁目十三番(株)東京三一九五二〇八
電話・東京(二六五)七一一(大代表) ㊟一〇二一

Printed in Japan ©Hiroyuki Itsuki 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0093-872206-0946(0)

燃
え
る
秋

装
丁

岡
村
元
夫

1

二十七歳のグラフィック・デザイナー桐生亜希が、その青年をはじめて見かけたのは、新町通りの宵山の雑踏の中だった。

その年の夏、彼女はひとりで京都へ三日間の小旅行に出かけた。ちょうど祇園祭の季節だった。この時期の京都へは全国からおびただしい数の観光客が押し寄せてくる。だが、彼女は祭りを見物にやってきたのではなかった。亜希は、或る決心をするために東京を離れたのだった。行先はどこでもよかった。たまたま京都の岡崎に、亜希の友人である夏沢揺子が小さなマンションを借りていて、彼女が夏のあいだ信州へ避暑に出かけるから自分の部屋を自由に使っていいと申出てくれたのだ。祇園祭の真最中で、混雑することが目に見えている京都を訪れることにしたのは、そのためだった。

亜希は七月十六日の午後、新幹線で京都駅に着いた。それは祇園祭の宵山の日だった。彼女はタクシー乗場の行列を見て車を諦め、市電を利用して友人の部屋のある岡崎へ行った。そのマンションは、丸太町通りからハンディクラフト・センターの前を右に折れ、京都會館へ抜ける道路の右側にあった。目的の建物に着くと、彼女は管理人の婦人に挨拶し、五階の教えられた部屋のドアをあけた。

人気のない室内には京都盆地の熱気が充満していた。亜希は揺子が残してくれていたメモ帳の指示にしたがってクーラーの電源を差しこみ、給湯のコックを開いた。メモ帳の最後に、走り書きのメッセージがあるのを彼女は読んだ。

へ寝室だけは鍵をかけて行きます。寝る時は奥の和室をお使いあれ。おふとん出してあります。あとは御自由に。祭りの晩に、いい青年でも引っかけて連れ込むぐらいの勇氣を出してちょうだい。とにかく、あの男とは別れたほうがいいと、わたしの裕くんも言っていました。人に忠告なんかできる立場じゃないけど、他人のことはよくわかるもんね。何かあったら藝科観光ホテルへ電話をください。では。〽

では、か、と、亜希はつぶやき、メモ用紙をたたんだ。それからひんやりしたクーラーの冷気に髪をなぶらせながら、窓の外を眺めた。正面に豊かな水量の疎水がI字型に折れて流れ、やや左手に京都會館のなだらかな屋根の傾斜が見えた。その屋根に重なって紫色の小高

い森が横にのびている。中腹に見える白い建物は都ホテルらしかった。道路を隔てて音楽大学の古風な木造の建物も眺められた。本格的な夏の始まりを告げる祇園祭のクライマックスを明日にひかえて、この古い都市は午後の日差の中にゆらゆらと揺れているように思われた。へ自分のことはわからないが、他人のことはよくわかるなんて嘘だ

と、亜希は考えた。彼女はそのとき、急に軽い目まいを感じた。そして白いジャギーの絨毯の上に、膝を抱えて倒れこんだ。

では、と、彼女はもう一度、声に出さずにつぶやいた。ではひとつ、おおせの通り、若い引き緊しなった体をした青年でもくわえ込んでお見せしましょうか。

それにしても本当に自分はあるのとなと別れることが出来るのだろうか、と、彼女は絨毯の長い毛足に頬を押しつけながら思った。

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。亜希が目をさますと、窓の外の空が少し暗くなっていた。時計を見ると七時だった。彼女は起きあがって顔を洗い、服を着替えて外へ出た。建物の通りに面した一階のヴァニールという店で軽い夕食をすませ、コーヒを飲んでしばらくぼんやりしていた。二本目の煙草を吸っていると、隣りに坐っていた学生ふうの若い男が、祇園祭を見にいらしたんですか、と、話しかけてきた。亜希が黙ってうなずくと、そ

の男は、ぼくもそうです、東京から来ました、と言った。

「宵山を見に行かれるんなら、うんとおそくがいいそうですね。十一時過ぎて見物客も引きあげてしまった後、ひっそりした町を歩くのが風情があるとパンフレットに書いてありました」

、感じの悪い相手ではなかったが、亜希は微笑しただけだった。若い男にほとんど関心を持たなくなってしまったのは、あの人いろいろなことを教えこまれ過ぎたせいだろう、と彼女は考え、急にわけもなく人混みの中に身をおきたいという強い衝動に駆られた。宵山を見に行ってみよう、と彼女は決め、店を出た。

疎水を渡ってしばらく歩き、京都ホテルの横を抜けて御池通りへ出た。そのあたりは明日の山・鉾の巡行のコースになっており、道路の左右に観覧席がしつらえてある。亜希は途中から小路へ折れて、鉾車や曳き山の飾られている古い網目のような町の胎内へ踏みこんで行った。

囃子と叫び声と灯火の渦の中を、見物客たちの影が暗い河のように流れていた。車の乗り入れが規制された道路を動いてゆく群衆の影は、なぜか古い人形のように陰気に見えた。その宵宮の祭りのにぎわいを傲然と見おろすように、各町の辻々に巨大な「鉾」や「山」がそびえていた。ビルの間の大通りを巡行する時の山・鉾は、華麗でどこかユーモラスでさえあ

るのに、この夜の町に居坐っているそれらは、異様なほどに大きく、無気味な感じさえした。亜希は室町通りをずっと歩き、それから新町通りへ右折した。彼女はそこで屋上に松を飾った巨大な山車を見た。

なんという俗悪さだろう、と、その装飾の氾濫ともいえる曳き山を眺めながら亜希は思った。だがまた、なんという豪壮な美意識のエネルギーだろう、とも考えた。

神話伝説に由来したグロテスクな人形。金地に描かれた細密な図案。錦地の水引きでふちどりされた胴体には、唐草や花文の異国渡りのカーペットが掛けられ、前には朝鮮物と思われる綴れ織りがさがっている。巡行のとき先頭に立つ長刀鉾の前に飾られたゴブラン織りは有名だが、いま彼女の目の前にそびえている「へ山」の華やかさも相当なものだった。東西文明の異様な混交がそこにはあった。これはまるで国際デザイン・コンクールだ、と、彼女は思った。

亜希がその「へ山」の前を離れようとしたとき、ひとりの男の横顔がすぐ隣りに見えた。陽に灼けた健康そうな青年の顔だった。なぜだかわからぬままに、亜希はその横顔に眺め入った。周囲の見物客の落ち着かない表情の中で、その顔だけが静止していた。彼は「へ山」の胴に掛けられた絨毯を、真剣な目つきで食い入るようにみつめていた。そこには宵山を楽しみに集ってきている観光客の表情とは、まったく別なものがあった。

亜希の視線に気づいた青年が彼女のほうを振り返ろうとしたとき、亜希はさりげなくその場を離れた。彼女は人波に体をまかせて、別な〈鉾〉や〈山〉のほうへ通りを遡行していった。

いくつ目かの〈山〉の前で、亜希は再びその青年と出会った。彼が見ているのは見事なベルシャ絨毯の前掛けだった。そのほかのものには余り関心がないようだった。時どきズボンのポケットから手帳をとり出して、何かを書きつけたりしていた。

何をしている人だろう、と、亜希は考えた。紺のボロシャツを着て、砂色の夏のスーツの上衣を腕に抱えている。髪は今どきめずらしくやや短か目に整え、どこか運動選手のような雰囲気も漂わせていた。年齢は亜希と似たりよったりの、二十七、八歳といったところだろう。

相手は、すでに亜希を意識しているようだった。彼は一瞬、なにか物言いたげな表情で彼女のほうを見た。だが、亜希はそしらぬふりでその青年を無視した。

新町通りの最後の〈山〉を見終った後、亜希は一度ふり返って青年の姿をさがした。だが、そこにはもう無表情な人々の雑踏があるだけだった。彼女は疲れた足をいたわりながら、夜の舗道をゆっくり岡崎の方へ歩いて行った。

部屋にもどると、和室に夜具を敷き、燈りを消して横になった。頭の中に、さっき見かけ

た青年の顔がかすかに残っていた。自分にもっと勇氣があれば、と、彼女は考えた。この部屋の持主がメモに書き残して行ったように、あの青年と一緒にここへ帰ってくることもできなかもしれない。彼女は暗い中で、陽灼けた青年の裸の胸や手脚の筋肉が自分の体にしっかり押しつけられるイメージを思い描いた。だが、それはいつの間にか別な、もっと年上の男の体になり、そのことが亜希にひどい屈辱を感じさせた。しかし、その屈辱感の中にかすかに満ちてくる快楽の予感もないわけではなかった。

① その晩、亜希は朝方まで眠れなかった。浅い眠りの中で、華やかな〈山〉と巨大な〈鉾〉が交合する奇妙な夢を見た。

2

桐生亜希が金沢の美術工芸大学を卒業したのは、四年前の春だった。彼女は学校を出るとすぐ、両親の住むその街を離れて、関西の大手の服地メーカーに就職した。仕事はテキスタイル・デザイン室の研究員助手ということだったが、入社してひと月もたつと、彼女はその会社をやめたいと考えるようになった。あたえられた仕事に、どうしても慣れることができなかったからである。それは外国から取りよせる雑誌や写真に出てくる生地デザインの中心

から一般に売れそうなものを探し出し、少し形を変えて国内向けに商品化する作業だった。要するにデザインの盗用である。

生きてゆくという事はこういう事なのかもしれない、と、亜希は何度も自分を納得させようと努力したが、うまく行かなかった。それは社会に出たばかりの世間知らずの若い娘の氣負いのせいもあっただろう。だが、それだけのこともなかった。亜希の体の中には、一点、そういう現実にとどめても慣れることのできない或る狷介な氣質、潔癖さというにはいささか強すぎる何かがひそんでいるらしかった。

入社して半年後に、亜希は退職願いを会社に出した。一身上の都合で、と書いただけだったが、直接の上司である中年のデザイン室長は、彼女の口に出さない部分を敏感に気づいていたようだった。

へどこの世界でもやってることなんやがね

と、彼は目を伏せて言った。

へなにも生地や洋服だけの問題やあらへん。音楽かて、思想かて、いうたら、この国の人間の今の生活自体が、みな外国文化のコピーの上に成り立ってることぐらい、きみにかてわかってるやろ。デザインの根は、人間の生活そのもんや。模倣された生活の中から独自のデザインを創り出そうというのは、まあ一種の自家撞着とちがうか

それはわかってるんですけど、と、亜希はかすかに顔をあからめて答えた。上司は黙って退職願いを机の上においた。

亜希はその後、いったん金沢へ帰り、しばらく家の仕事を手伝いながら暮した。彼女の家は何代も続いた有名な仏壇屋だったが、この四、五年、経済的に少しずつ破綻を見せはじめたのである。亜希はその家の女ばかり三人姉妹の次女だった。

亜希はやがて翌年の三月に上京した。海外向けの動画フィルムを制作しているプロダクションに知人を介してもぐり込んだのだ。給料は安かったが、不愉快な仕事ではなかった。だが、亜希はなぜかその職場にも、少しずつあきたりないものを感じはじめた。同僚の青年と、なんとなく恋愛めいた間柄になったりもしたが、それも続かなかった。そのうち彼女は、次第に仕事の単調さを苦痛に感じるようになってきた。

亜希が不思議な男と知り合ったのは、ちょうどそんな時期だった。マックス・エルンストの作品展を京橋の美術館に見に出かけたとき、会場でその男に話しかけられたのである。それはこれまで彼女が経験したことのないタイプの男だった。

その頃から今日までの二年あまり、亜希は父親はとも年の違うその年上の男と、ずっと体の関係を持ち続けてきていた。その男は、ニューヨークにも店を出している有名な画廊の経営者だった。影山良造というのが、その相手の名前である。

彼女が最初に影山と別れたいと考えたのは、高輪^{たかなわ}の泉岳寺に近い彼の仕事場で、はじめて彼に抱かれたすぐ後のことだった。それは化学の実験でもするかのような冷静な手つきで巧みに未熟な彼女の体をあしらった影山に嫌悪感を抱いたからではなく、その反対の気持ちからだった。こんなふうには慣らされて行ったら、自分はどうこの年上の男から一生逃げられなくなってしまうのではないかと、二十五歳の亜希は最初に彼と寝たあと、本能的にそう感じたのだ。彼女はその後、体も洗わずに彼の部屋を出た。そして自分のアパートにもどると、風呂を沸かし、朝方まで憑^つかれたように石鹸で体のすみずみまで洗い続けた。

だが、それから三日後、亜希は自分のほうから影山の店に電話をかけてしまった。そして、その晩は影山と一緒に湘南のホテルに泊った。翌日、東京へ向う車の中で、もう二度と自分から影山に電話をかけるのはよそう、と亜希は自分に言いきかせた。だが、今度は影山のほうから彼女のプロダクションに電話をかけてきた。

やがて亜希は少しずつ影山に慣らされていった。性のこともそうだったし、美しいものや贅沢^{ぜいたく}な生活にもそうだった。しばらくして彼女は影山の紹介で、或る広告代理店に転職した。大規模な会社ではなかったが、その業界では名の知れた代理店だった。亜希はそこで広告部門のデザイナーとして働いた。収入も満足できたし、仕事にも興味が持てた。亜希の生活は、一応軌道に乗ったように思われた。

そんな彼女にとって、ひとつだけ耐えられないものがあつた。それは影山との関係のことだつた。

影山と亜希との間には、何の約束も、目標もなかった。離れて行きたければいつでも自由にしないさい、と、彼は言っていた。影山には外にも何人か女がいる様子だつた。それは決して亜希の嫉妬の対象とはならなかつたが、彼に愛されていない事は、はっきり判っていた。あの人はわたしを初老の紳士の愛玩物として大事に磨きをかけようとしているのだ——と彼女は思った。それは最初の夜から気づいていたことだつた。

亜希はいつも影山と別れることばかり考えながら、この二年間を過ごしていた。そしてそれが出来ないことで、彼女はひどく傷ついていた。自分はどうかしてしまつたのだ、と彼女は考えた。

亜希は半年ほど前の冬の朝、いちど自殺を企てて失敗している。その時も影山は病院に高価な蘭をとどけてくれただけだつた。彼女が退院して、影山に電話をかけたとき、彼は穏やかに、別れたければいつでもそうしていい、このままつき合つて行けそうなら今まで通りにしないさい、と言つた。その晩、亜希は自分から頼んで影山に抱かれた。そしてもう二度と顔を合わせないつもりで、彼の部屋を出た。しかし、それからまた同じような事がくり返され、亜希は少しずつ瘦せていった。その年の春がやってくる頃、亜希は理由のない目まいや、心

惇元進に悩まされるようになった。会社の嘱託医の診断では、自律神経失調症ということだったが、亜希はほかに本当の原因があることを知っていた。

やがて梅雨の季節になった。気象庁の予報では、空梅雨の年になるだろうということだった。だが、その予想とは反対に、六月から七月にかけては冷雨の降る暗鬱な日が続き、亜希の体の具合もますます悪くなってゆく一方だった。

亜希はいよいよ最後の決断を迫られていた。体の不調の原因も彼女にはわかっていた。優柔不断の亜希の心に対して、肉体が愛想をつかして怒っているのだ。これ以上はもう保たない、と彼女は感じた。自分を守るために、今度こそはつきり影山と別れなければならない。

七月のなかば、街に本格的な夏の気配が近づいてきた或る日、亜希は影山に短い手紙を書いた。そして会社を休んで、ひとりで祭りでにぎわう京都へやってきたのだった。

3

京都へ着いた日の翌日、亜希は午後になって目をさました。和室の障子に強い陽ざしが当たっていた。昨夜、宵山の町で見た〈山〉や〈鉾〉は、もう晴れの巡行を終えたのだろうか、と亜希は考えた。夢の中に出てきた〈山〉と〈鉾〉のからみ合いは、ひどくなまなましい感